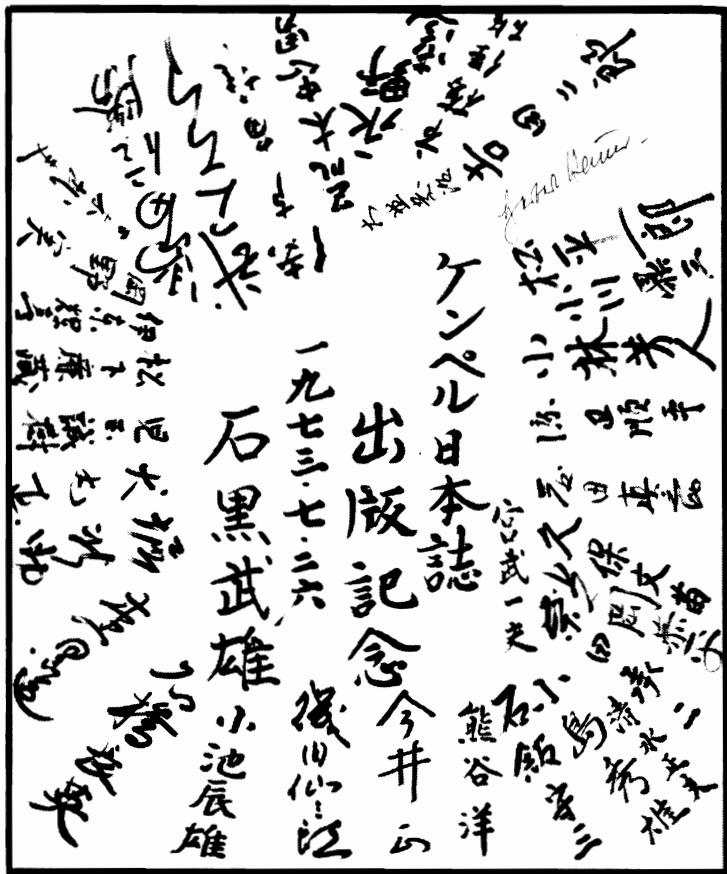


ケンペルの「日本誌」発刊記念パーティ

挨拶 および 祝辞



当日、御出席諸先生の寄せ書き著名



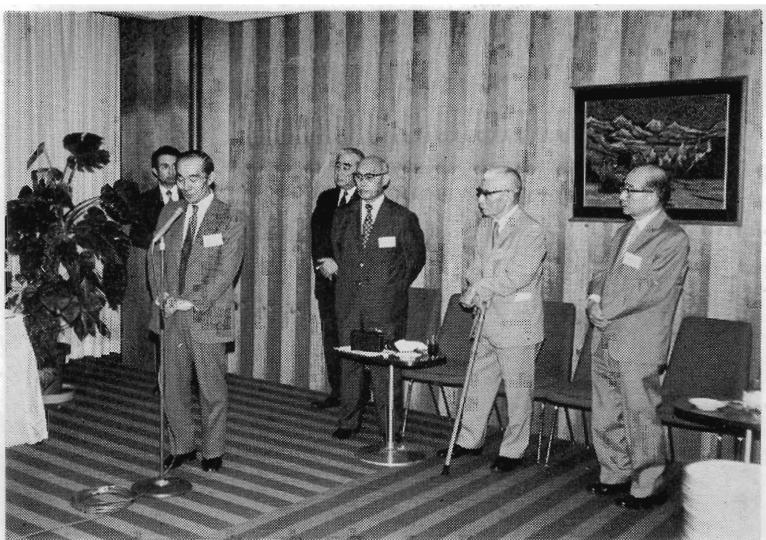
ケンペル “日本誌” の英語、フランス語、ドイツ語—各国語の初版本および完成した全訳日本語版を前にして。

向って右より松平先生、武見先生、小島先生、今井先生、石黒社長
石橋先生。



記念パーティ開始前、御歓談の一刻。

向って左より石黒社長、武見先生、石橋先生、小林先生、熊谷先生
小川先生。



祝辞を述べられる外務省・堀文化事業部長。その後方、向って左より松平先生、石黒社長、石橋先生、小林先生。



ドイツ大使館を代表して出席されたバウアー文化部長。その前、向って左より石黒社長、石橋先生、久保先生。



展示された各国語版に見る来賓諸先生。

もくじ

一、まえがき

二、挨拶および乾杯の音頭

第一製薬株式会社社長 石黒武雄

東京銀行相談役 松平一郎(乾杯の音頭)

レムゴ会会長
ケンペル会会長
協会名譽會長

日本医学会会長 小林芳人

元ベルリン領事 今井正

日本医師会会长 武見太郎
日本薬学会会長 柴田承二
日本薬剤士会会长 石館守三

15 14 12 12 10 8 7 6 4 4 3

三、祝辭

在日ドイツ文化大使館	H・バウアード
文部省情報報業文化部長局	堀新助
獨協学園理事長	松下廉蔵
日本医学会副会長	熊谷洋
ビーティヒハイム会副会長	湊
記念パーティ出席者名簿	

23 22 21 20 18 16

まえがき

ケンペルの「日本誌」の画期的な全訳発刊を記念して、昭和四十八年七月二十六日、東京都千代田区大手町、経団連会館で出版記念パーティを催しましたところ、別紙の通り諸先生の御臨席を賜りました。当日は、東京銀行相談役松平一郎先生、日本医師会会长武見太郎先生および日独協会副会長小島秀雄先生にそれぞれケンペル「日本誌」の英語版、フランス語版、ドイツ語版のいずれも初版本を御持参頂き、それを会場に展示することができました。各国語版の初版本が一堂に展示されたことはまさに珍しいことであり、これによって日本語版発刊記念パーティーに錦上さらに花を添える集りになりました。

この小冊子は、当日の諸先生の御挨拶や御祝辞を録音

テープから収録したものであります。当日御欠席の関先生からは御祝辞を郵送して頂きましたので、併せて掲載いたしました。なおこの筆記は、諸先生の校閲を経ておりません。万一筆記に誤りがございましたならば、御容赦下さいますようお願いいたします。

昭和四十八年八月

第一製薬株式会社

第一製薬株式会社

石黒武雄社長 挨拶

今回エンゲルベルト・ケンペルの「日本誌」全訳発行に当たりまして、ささやかな記念パーティを催すべくご案内申し上げましたところ、諸先生におかれましては、

ご多用中のところをまげてご出席いただきまして、まことに有難うございました。厚くお礼申し上げます。

このケンペルの「日本誌」につきましては、一昨年の春頃でしたか、私の尊敬する石橋先生からこの全訳発刊についてのお話がございました。私は、これは大変に有意義な仕事であると考え、喜んで発刊を引き受けさせていただいたような次第でございます。

この本の刊行に当たりましては、監修者の石橋先生はもとより、かねて日本民族として記念すべきこの大著が、肝心の日本語に全訳されていないのは、まことに残

念なことである、とおっしゃっていました小林芳人先生の御協力を頂きました。

このような次第で、今回上巻の発刊が出来たのでござりますが、これには日本医師会会长の武見先生、およびドイツからはケンペルゆかりのドイベル博士、コルンフレルド博士、ハナー・ベック教授からも序文を頂きまして、巻頭を飾ることができましたことは、まことに感謝に堪えないところでございます。

さらに元ベルリン駐在の領事をやつておられました今井正先生が、この極めて大作かつ難解な原著に取り組まれまして、その翻訳と解説に非常な情熱と御努力を傾けられ、誠に短日月の間にその大業を成しとげられましたことに対しまして、心から敬服しているものでございます。

す。

また出版に大変御協力をいただき、立派な本になりました
霞ヶ関出版の大野社長の御厚意にも、感謝申し上げ
るものでございます。

その他直接、間接に、この発刊に際し御指導と御協力
いただきました諸先生に、心からお礼申し上げます。

なお最後に、ケンペル「日本誌」欧文版の非常に珍し
い初版ものを、そのドイツ語版を小島秀雄先生から、フ
ランス語版を武見太郎先生から、英語版を松平一郎先生
からそれぞれ本日御持参いたしまして、ここに展示す
ることができました。御覧いただいたと思いますが、こ
の貴重な蔵書をわざわざ御提供下さいました御厚意に対
しまして、厚くお礼申し上げます。

本日は粗酒粗肴でございまして、誠にささやかなパ
ーティではございますが、どうぞゆつくりと御歓談いただ
きますれば、まことに有難い次第でございます。

東京銀行相談役

松平一郎先生（乾杯の音頭）

甚だ僭越ではございますが、御指名がございましたので、乾杯の音頭をとらせていただきます。

私もケンペルにつきましては、大変な関心を持っております。またケンペルの著書だけではなく、日本に参りました各国の人達の遠征記、例えばペルー、プチャーチンその他の人人が書いた日本遠征記の原書を二~三手に入れましたが、そのいずれにもケンペルが引用してございまして、いろいろケンペルの見方や調査も書いてあり、大変興味を抱いたわけでございます。

私は学者でもなく、医者でもありません。今日の席には甚だ場ちがいのようにも存じますが、御指名がございましたので、乾杯の音頭をとらさせていただきたいと存じます。

本日、ケンペル「日本誌」の全訳発刊に際し、心からの御祝辞を申し上げるものでございます。
おめでとうございました。

ケンペル協会名誉会長
レムゴ会会長

石橋長英先生 挨拶

ドイツ大統領テオドル・ホイスはもう亡くなりました
が、その著書の中で、「この本（ケンペル・日本誌）は
ドイツ人の心を捉え、過去を現在に引きもどす力を持つ
てある」と言っています。これはドイツ人ばかりでな
く、日本人にも同じことが言えると思います。

今から約三百年前に、ケンペルが「ディスカバー・ジ
ャパン」に尽して偉大な功績をあげていますが、その功
績を現在に再評価するということは、文化史に科学史に、
あるいはまた民族の相互理解の上に、現代人にとって非
常に重要な意義があると考えております。こういった意
味で、日本語版が出来たということを非常に喜んでいま
す。同時に、心からお祝いを申し上げる次第でございま

す。

私は来月ドイツに参りますが、その時にこの貴重な立
派な本をお土産として、しかもただで持つて行けるよう
な機会を与えて頂いたことに対し、石黒社長に厚くお
礼を申し上げます。

これをもって監修者の一人としてのご挨拶に換えさせ
て頂きます。

日本医学会会長

小林芳人先生 挨拶

簡単に御挨拶申し上げます。

ケンペルの「日本誌」がこれほど大きな著述であると
いうことを実は最初存じませんで、ケンペルとはどうい
う人であるかということに興味と関心を持って調べ出し
たのが、事の始まりでございました。本日は御都合が悪
く出席されませんでしたが、私が本席でお礼を申したい
と思っていた東大文学部の元教授、沼田先生（東大史料
編纂所長）にケンペルの諸文献をお借りしたのが始まり
なのです。またその前には、元東大教授であり日本歴史
の専門家である岩尾博士が書かれた徳川時代の鎖国篇を
興味深く読んだことがあります、徳川時代の鎖国を論
じた文章は、この「日本誌」の附録として下巻に出て参
ります。

鎖国は、日本の歴史に非常に大きな影響を与えた徳川
時代の政策でありまして、ケンペルは、「この鎖国は、
日本が歐米諸国の属国になることを免れた賢明な政策で
あつた」という結論を出しています。しかし「鎖国は本
来は天理に反する」という字句が、その文章の中に書か
れておりまして、この字句が当局の忌避にふれ、従つて
この原書の輸入が禁じられたため翻訳の手がかりがな
く、日本人はケンペルの著述に接することができなくな
りました。

次に明治時代において、この重要な著述がどうして日
本語に訳されなかつたのかを考えて見ますと、これには
理由があります。ケンペルは、日本の歴史をドイツ人と
して見た通りを書いており、天皇と幕府の関係もそのよ

うに記述しています。御承知のように戦前は軍部の力が強く、日本の本当の歴史というより非常に水増しされ、ゆがめられた日本史を教えられたものです。従つて、戦前はどうていこういうものは翻訳できなかつたろうと思います。そして、今日、日本語版ができましたのは、やはり一度その時機が到来したのであると考へるわけです。

望むべくは、もつと早くこの翻訳が出来ておればといふのですが、実際にも欧洲の重要な国で出版された「日本誌」が日本自身になかたことは非常に残念でしたが、しかしここにようやく日本語版が出来まして、心から嬉しく思っています。

下巻に収録されている鎖国篇は非常に興味深いもので、私は楽しみにして待っている次第であります。

元ベルリン領事

今井正先生 挨拶

早いものでございまして、私がこの翻訳をやろうと思
い立ちましてから、すでに二年半余りになります。どう
してこの翻訳をやる気になつたかは、上巻の「訳者あと
がき」にも書いてあります。ただしまあお話のあつた
小林先生が、「日本民族として記念すべきこの大著述が、
肝心の日本語に全訳されていないことは、まことに残念
なことである。何とかして出版したい」という御趣旨の
感想を述べられたのを聞いたのが動機であります。私は
その後、そんなことはないのではないかと思い調べ
てみましたら、たしかに日本語による全訳は出ていませ
んでした。それで早速、翻訳計画を立てて石橋先生に御
相談申し上げましたところ、「是非ともやれ」と激励さ
れ、やる気になつた次第でございます。

まず小林先生の御紹介で、東大史料編纂所の沼田先生
を数回お訪ねし、学術的な助言を受けましたし、第一製
薬の石黒社長からも御支援を受けることになりました。
こうして出来上りました原稿は、四百字詰で約二千四百
枚位になりました。実際に執筆したのは昨年の九月から
今月の三月末までですから、比較的スピードに作業が
進捗したわけですが、実はそれまでの執筆準備に相当の
時間がかかっております。その間たえず御支援と激励を
賜った石黒、石橋、小林、沼田の諸先生には、心から感謝
いたしている次第でございます。

私が翻訳の原書に用いましたのは、今日、小島先生が
お持ち下さいましたものを復刻したドイツ版です。もと
もケンペルは主著『日本誌』をドイツ語で書いたので

すが、いろいろ事情がありまして、原稿は他の手稿や文献とともに全部英國に渡り、最初に出版されたのは英語版でした。それは本日、松平先生がお持ち下さったものでです。それからオランダ語版とフランス語版が刊行されました。フランス語版は本日、武見先生がお持ち下さいました。オランダ語版は、当時日本へ一番早く入って参り、平戸藩主であった松浦家に今でも伝わっていると思ひます。今日は上巻の訳者あとがきの中で、「松平先生が英國版、小島先生がドイツ語版、武見先生がフランス語版を持っておられるはずである」と書いておきましたところ、図らずも御三方面によつて、それぞれお持ち寄り願うことができ、一堂に展示されることになりましたのは、まことに意義深いことと存じます。

本書の制作に当りましては、ここに出席しておられました霞ヶ関出版の大野社長や、元中央公論の調査部長だつ

た伊東さんに一方ならぬお世話になりました。編集には完璧を期したのであります。出来上ったものを通読してみますと、やはりところどころにミスがあります。差し当り正誤表を作ろうと思っています。どうぞ御気付きの点がございましたならば、御教え願いとうございます。

本日は、いろいろとどうも有難うございました。

日本医師会会長

武見太郎先生 祝辞

非常に大勢の方々の善意が実りまして、このような貴重な学術書が今日発刊されましたことは、日本のためにもまたドイツのために、大変うれしいことであると存じます。

実は私は、歴史には全く門外漢でございましたが、私の患者さんの中にもたまたま幸田露伴先生の弟の重友博士がおりまして、私が買ったシーボルトの原著をお目にかけましたところ、それについて先生からいろいろと伺い、シーボルトよりも前にケンペルがいるということを、幸田先生から非常に詳しくお話をいただきました。幸田先生は、日本とヨーロッパの関係を調べたその当時の草分けのような方でしたから、私はそれ以来、ケンペルのことを頭のどこかに置いておりました。そういう

たしますと、ケンペルの肖像画が石橋先生から日本医師会に寄贈されるようなこともございまして、私はケンペルに大変興味を持つようになりましたところ、昨年でしたか偶然古本の市で、本日持参いたしましたこのフランス語版のケンペル「日本誌」を見つけました。七万円位でしたか少々高かったのですが、買って来てフランス語の先生に見せましたところ、これは今のフランス語ではないので、フランス語からの翻訳は、日本ではちょっと簡単にはできないよ、と言われました。ところが石橋先生から、日本語訳が出ると聞かされ、これは大変なことであると思ってるところへ、今井先生の訳本を先日戴きまして一部分拝見いたしました。

翻訳とは思えないほど非常にわかり易い訳ができるてい

まして、私は非常に有り難く思つたわけであります。ど
んないい本でも訳が難しく翻訳くさいと読む気がしない
ものですが、この本は割合忠実に訳され、われわれが読
み易い表現で訳されておりますので、大変有り難く思つた
次第です。

こういう本が、日本で出るべくして出なかつたということ
を考えて見ますと、この翻訳の完成というものは、
やはりケンペルが医者であつたというだけではなく、大
きな意味におきまして大変喜ばしいことだと思いますの
で、心からお礼を申し上げたいと思ひます。

どうも有難うございました。

日本薬学会会長

柴田承二先生 祝辭

本日このような、日本にとって、とくに日本の科学界にとつて非常に有益な本が出版されました。これに携われました石橋先生、小林先生、今井先生、そしてそれを実現にもつて行かれた第一製薬の石黒社長に、われわれとしても感謝いたしております。

実はケンペルにつきましては、私はあまり知らなかつたのですが、数年前に亡くなりました武田の三宅馨さんから託された本に、イギリスの園芸学者ドクター・フォーチュンの「江戸と北京」というのがありました。これはフォーチュンが萬延元年、日本の開国期に来日し、日本を回って書き上げた本で、この中には長崎から江戸にかけていろいろのことが書かれています。非常に立派な内容で、園芸学でありますから植物学から言つても詳し

い記載がございます。この本を読んで行く内に、このケンペルの偉業が出て来ますので、私はそれによってケンペルの存在を知つたのでござります。

ケンペルにしても、シーボルトにしても医学者で、日本に来て日本の状態をヨーロッパに紹介したということで非常に意味があり、われわれにとつても幸いであります。本日、日本語版が立派に出来まして、日本語で読めるということは大変に有難いことでござります。そしてケンペルが、医学とともに薬学も勉強していたことがこの本に書いてありますが、われわれ薬学界におきましても医学界におきましても、日本語による本書の全訳は、ことさら意義が深いものでござります。

本日は、おめでとうございました。

日本薬剤師会会长

石館守三先生 祝辞

ただいま柴田薬学会会長から祝辞がありましたが、今回私共は、本当に技術的に無知であったということを、ケンペルの著書を見て知ったわけであります。私も柴田君が話されたように、三宅さんの持つておられた本の中にケンペルという名が出てくるが、ケンペルとはどういう人であったかということに、大変興味をもつて考えておりました。今日、皆様のお力、とくに石黒社長の義侠心によつて、ここに二百五十年以上も前に書かれたケンペルの本を手にすることができまして、長生きしてよかつたと事改めて感じたわけであります。

偉大な開拓者とでも申しましようか、十七世紀の頃に、ケンペルというような偉大な人物が日本をつぶさに紹介しているのを見まして、こういう人物がどんどん海

外に出て行つた当時のヨーロッパを想い起し、立ち遅れた日本のことを考えさせられます。「温故知新」という言葉がありますが、冒険好きな、そして人類に貢献する志を抱いた昔の人、ケンペルのような偉大な人物の書いたものを、新しい日本人々にもう一度読んでいただきて、日本にもこういう人が多く出てくるように希うものです。

誠に記念すべき著書が、皆様のお力によつてわれわれの眼で見ることができたということの幸せを感謝して、心からお喜び申し上げます。

在日ドイツ大使館参事官 文化部長

ドクトル H・バウアーア先生 祝辞

極めて簡単にドイツ大使館およびドイツ代理大使シュルツェ・ボイセン氏の御挨拶を申し上げると同時に、エンゲルベルト・ケンペルの主著「日本誌」の日本訳の刊行に貢献された方々に対し、お礼を申し上げたいと存じます。とくに第一製薬の石黒社長ならびにこの翻訳を世に出すために持前の実行力を発揮され、ついに本書の刊行を達成された石橋教授の御努力、さらにはこの翻訳の大業を引受けられた訳者の今井さん、——今井さんは多年来ドイツとは密接な関係にあり、この仕事にはまことに打ってつけの方なのですが——に感謝の意を表します。

エンゲルベルト・ケンペルは、申すまでもなく自ら日本地を踏んだ最初のドイツ人医師であります。かれは

一六九〇年から九二年にかけてオランダ商館付の医師として長崎に滞在し、その間二回にわたって江戸へ旅行し、文字通り日独医学の交流に先鞭をつけ、その成果は後世とくに十九世紀に顕われ、現在にまで伝えられています。

しかしあれは、オランダ商館付の医師としての職務を遂行するだけでは満足せず、慧眼を以って当時閉ざされていた異国およびその国の住民の異邦的な風俗習慣を見極め、その国を理解するために努力しました。

ケンペルの主著は、このような偉大な人間の知識欲と研究心を立証して余すところがありません。

徳川時代の初期に、一外人が日本をどのように観察し、どのように記述したか、それは現在の日本人にとつ

ても興味のあるところであり、この本は非常に興味をもつて読まれるに相違ありません。私は本書が日本において広く読まれ、関心を持つ多くの読者に親しまれるようになることを希望いたします。

外務省情報文化局
文化事業部長

堀 新助 先生 祝辞

ケンペルの「日本誌」の全訳が出来ましたことを心から嬉しく思っております。同時にいささか驚いてもおりますので、驚きの方から申し上げます。

と申しますのは、極めて価値が高く、国際的に認められているケンペル「日本誌」の完全邦訳が、今初めて出来たということです。これは私があるアメリカの日本学者から聞いた話でありますが、「世界で一番便利な言葉を知っているか」と聞くものですから、「それは英語だろう」と申しますと、「いや、日本語だ」と言われたのであります。「日本ではあらゆる外国の貴重な文献が、日本の言葉で読める」からだというのです。それに拘らず、ケンペルの「日本誌」が全訳されたのは、今

回が初めてであり、これにはいささか驚きを感じる次第であります。

皆様御承知の通り、われわれは日本というものが国際的にはなかなか理解されるところが少いということで、日本の国情を世界に紹介する努力をしているわけであります、三百年も前に、ケンペル先生が日本の国情をヨーロッパに紹介した。その功績に対し、今回その主著の完全邦訳を出して、ケンペルを追賞することが出来ましたことは、まことに喜ばしいことであります。

今まで日本語の全訳が出来なかつたのは、恐らくこの本は学問的には価値が高いが、商業的でないということだったからでしょう。この全訳が出来ましたことは、諸

先生の御努力によるものでございますが、とくに石黒社長の御尽力によるものと推察いたします。また訳者の今井さんは、私の古くからの知合いであり、邦訳の大事業に二年以上も費して、立派に全訳を完成して頂いたことに對し、心からお祝いを申し上げるとともにお礼を申し上げます。

厚生省薬務局長

松下廉蔵先生 祝辭

私は、このような著述の文化的な本当の価値を理解する知識に疎い者でございますが、仕事を通じて教えられますことは、医学、薬学等の医療に関する学問は、自然科学として国際的に共通のものを持つ反面、それぞれの

人間生活の風土に根差す非常に強い民族的な特性と申しましょうか、国民的素質と申しましょうか、そうしたものがミックスした感情の上に立っているという感じがいたします。とくに日本における医療の中で薬学の領域を拝見いたしますと、そのように育成された医学の上に専門科学がとり入れられて、渾然一体となり、今日の医療体制が出来ているという感じがするわけであります。そういう意味では、今後の医学、薬学、私どもの仕事に関連する分野を諸先生方にも発展させて頂きますために

は、各国の現時点での最近の学問を導入すると同時に、古く遡って日本における医学、薬学の淵源を極め、文化史的ないし風土的な研究をすることも、不可欠の仕事であると思います。

伺うところによりますと、ケンペル博士は、元禄時代に日本に来られたヨーロッパの医師であり、また薬学の大家であるというお話でありますが、このような方が日本を観察した記録が、今回初めて諸先生方の御努力によりまして世に出たということは、文化史的にも大きな偉業であろうと存じます。私が担当している仕事の領域におきましても、今後も医療の進展に大いに貢献するものであると思い、関係者の御努力に対して、お礼申し上げるとともに心からお喜び申し上げます。

独協学園理事長

関 湛 先 生 祝 辞

「ケンペル・日本誌」のご出版、おめでとうございま
す。

実はドイツのエンゲルベルト・ケンペル協会から、獨
協医大設立のお祝いに、ケンペルの肖像油絵が寄贈され
ております。またケンペル高等学校からは、生徒の図画
が獨協高校に贈られ、ひき続いて日獨学徒の図画や作文
の交換をやりたいと言つて参りました。
ちょうどこれと時を同じくして、世界的に有名な「ケ
ンペル・日本誌」の日本語訳が出版されましたことは、
獨協学園にとりましても何かご縁があるようと思われま
して、喜びは一入大きいのでござります。

ドイツから送ってきた図画の贈呈式が先日行なわれた
際、石黒社長から獨協高校に「ケンペル・日本誌」の立

派な本をご寄贈いただきました。ありがとうございました。
厚くお礼申し上げます。独協学園は、これを重要教
育資料として大切に保存いたします。

私は、この度出版された「ケンペル・日本誌」がひろ
く各方面で多くの人々から読まれ、民族間の相互理解の
上にその価値が再認識されることを祈つて止みません。
これがまた、今回のすばらしい大事業に携われた皆様が
たのご苦労の報いられる所以かと存じます。

本書のご出版を心からお祝い申し上げて、ご挨拶とい
たします。

ビーティヒハイム会副会長
日本医学会副会長

熊谷 洋先生 祝辞

本日はおめでとうございます。この発刊に当たりまして、皆様方にまず心からお礼を申し上げます。

「日本発見」の偉業がケンペルによって三百年近くも前に行なわれたことが、今回の翻訳によって再確認されたわけでありますが、石橋先生にはかねてから一つの大きな狙いがあるようすに押察されます。ベルツ先生の場合には、ドイツの寒村ビーティヒハイムに日本とドイツとの交流を図る会が作られ、こんどもまたケンペル先生の生誕地レムゴに、日本とドイツとの交流の会が作られたのです。

今日ここにおいでの方々は、大体ご年配の方が多いようですが、そういう神秘的なつながりを土台として、人

間と人間との結び付きを作り上げ、若い時代に添つて行こうという、なかなか雄大な石橋先生の計画を理解しておられる方々です。今の言葉で申しますならば、今回の出版は、前向きに日本とドイツの文化交流の方向を示すものでもありますし、私はその意味で今日の出版のお祝いを申し上げると同時に、石橋先生の御努力に対して、大いに敬意を表したいと思います。

今日は、どうもありがとうございました。

ケンペル「日本誌」発刊記念パーティ

昭和四十八年七月二十六日 於・経団連会館

御名簿（五十音順）

御出席

氏名	役職名
久岡小緒市犬磯石荒	外務省情報文化局・国内広報課長
保野川方丸橋田館木	日本薬剤師会会长
文鼎富保仙守忠	獨協医科大学副学長
苗実三郎直雄	レムゴ会会員、慶應病院長
医薬情報センター所長	国際交流基金常務理事
	東大名誉教授、蘭学資料研究会会长
	順天堂大学教授、日本医史学会理事長
	レムゴ会会員、日本新薬（株）

氏名	役職名
熊谷小洋	ピーティヒハイム会副会長、日本医学会副会長
独協高校校長	日獨協会副会長
日獨協会副会長	日本薬学会会長
国際交流基金資料部長	日本國際医学協会理事
日本薬学会会長	日本醫師会会长
日本醫師会会长	カルスルーエ会副会長、エーザイ(株)社長
レムゴ会会員、永野診療所所長	ドイツ大使館参事官、文化部長
カルスルーエ会副会長	カールスルーエ会副会長、文化事業部長
外務省情報文化局・文化事業部長	レムゴ会副会長、東京警察病院小兒科医長
厚生省薬務局長	東京銀行相談役

御
欠
席

氏名	役職名
森 渡 (代理・順平)	日本薬剤師会事務局長
木 武 夫	ピーティヒハイム会副会長、日本新薬(株)社長
石 橋 光	日本製薬団体連合会副会長、山内製薬(株)社長
橋 島 雄	
橋 村 三	
治 研 包	
光 日 出	
史 史 漢 平	
西 鈴 木 R・シンチンガード	レムゴ会員、石橋医院院長
竹 関 万	レムゴ会員、ヘキスト・ジャパン医学研究所長
関 内 次 郎	日本医学会副会長
竹 鈴 木	東京医大理事、東大名誉教授
関 今 日	東京医大理事、東大名誉教授
竹 鈴 木 R・シンチンガード	国際交流基金理事長
関 今 日	ドイツ東アジア研究協会(OAG)前会長
竹 鈴 木 R・シンチンガード	日本製薬団体連合会会长、三共(株)社長
関 今 日	独協学園理事長
竹 鈴 木 R・シンチンガード	レムゴ会員
関 今 日	(財)世界の動き社・常務理事

関

係

者

氏名	役職名
氏名	役職名
沼田 次郎	前東大教授、史料編纂所長
福田 保	国際治療談話会委員長
シエルツエ・ボイセン	ドイツ大使館、代理大使
法眼 晋作	外務次官
松川 金七	日本医師会副会長
宮武 一夫	エンゲルベルト・ケンペル協会名誉会長
小林 芳人	日本国際医学協会理事長
石橋 長英	東大名誉教授、日本医学会会長
今井 正	レムゴ会副会長 第一製薬(株)社長
石黒 武雄	元ベルリン領事
大野 慶治	カールスルーエ会会員、第一製薬(株)専務取締役
伊東 輝彦	霞ヶ関出版(株)社長
第一製薬(株)関係 清水 他正夫 名夫	前中央公論調査部長 常務取締役

発行日

昭和48年9月20日

製作

霞ヶ関出版株式会社

発行所

第一製薬株式会社

〒103

東京都中央区日本橋三丁目四一〇

TEL(171)0611

(非
売
品)